

長岡京跡右京第 1019 次調査現地説明会資料

2011 年 9 月 3 日

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

遺 跡 名 長岡京跡右京八条二坊二・六・七町

所 在 地 長岡京市調子一丁目 25-1 他

調査期間 2011 年 2 月 14 日～2012 年 3 月 31 日（予定）

調査面積 約 6000 m²（予定）

はじめに

立命館中学・高校の建設に伴って 2011 年 2 月 14 日から大阪成蹊大学構内で調査を行っています。現在までに試掘調査と 1～4 トレンチを合わせて約 3000 m²の調査を行いました。すでに 1・3 トレンチは調査を終了して、2・4 トレンチを調査中です。今回の現地説明会では 2 トレンチの調査成果について報告します。

見つかった遺構

〈戦国時代〉

堀 SX09 幅約 4 m、深さ約 2 m の南北方向の堀で、2 トレンチでは 26 m、試掘調査を含めると 49 m にわたって確認されました。規模や形状から単なる境界溝や用水路とは考えられず防御用の堀と見られます。この堀は古い航空写真や地図をみるとさらに北と南に痕跡が残っていて、約 400 m 近くの長さがあったようです。堀はよく観察すると場所によって形や大きさがわずかに異なっていて、掘削した時の工事の単位ではないかと思われます。この堀は江戸時代のうちに埋め立てられて、その後は水田となりました。堀からの出土遺物は非常に少ないのですが、16 世紀頃の茶釜と白磁碗の小さな破片が出土しています

調査地のすぐ東にある恵解山古墳は、以前から山崎合戦（1582 年）の際に明智光秀の本陣が置かれた場所の候補地でしたが、近年の調査によって古墳全体が陣城として利用されていることが判明していて、その可能性が高まっています。今回見つかった堀はそれに関連する施設ではないかとみられます。

〈平安時代〉

井戸 SE83 一辺約 1 m、深さ約 3 m の方形井戸で、井戸枠は残っていませんでしたが、中からは 9 世紀後半頃を中心とした土器が大量に出土しています。内容は土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、瓦などで、井戸を埋め立てるときに放り込まれたようです。また井戸の底近くには水汲みに使ったとみられる須恵器の甕が残されていました。

当調査地の周辺は山城国府の推定地にあたります。国府は今の県庁や府庁に相当する役所で、山城国府は何度も移転を行っていたことが文献からわかっています。794 年に平安京に都が移るとしばらくして（797 年）、入れ替わるように現在の太秦から長岡京の跡地に山

城国府が移されます（第 3 次）。さらにその後 861 年に大山崎に移転（第 4 次）しますが、今回見つかった井戸の遺物は大山崎への移転の時期と近く、国府に関連する遺構と見られます。これまでも周辺では同時期の建物群や遺物が見つかっていて、わずかではありませんがその実態が明らかになりつつあります。今回の調査でも長岡京期の遺構が埋まった跡に掘られた柱跡があり、建物も存在していたと見られます。

〈長岡京期〉

掘立柱建物 SB88 南北 2 間、東西 5 間の東西棟建物で、南に廂を持っています。建物の内部には須恵器の大きな甕を据え付けた丸い穴が南北 3 列、東西 8 列、総数 23 個残っていました。南側中央付近には甕の据え付け穴はなく、出入りや作業のための空間となっていたようです。このような建物は文献や木簡などから、酒などの醸造を行っていた施設と見られます。当地は長岡京の右京八条二坊七町にあたり、都の中ではかなり南に位置しています。2 トレンチの西側で 1986 年に行った調査でも同様の甕据え付け穴を持った長大な建物が見つかったことから、この場所は醸造施設が集中して建てられていたようです。

溝 SD84 SB88 の西側にある南北溝です。幅約 2 m、深さ 0.2 m で、中からは長岡京期の食器類などのほかに須恵器の大甕ほぼ一個分が壊れた状態で出土しています。おそらく SB88 に据えられていた甕の一つだと思われます。

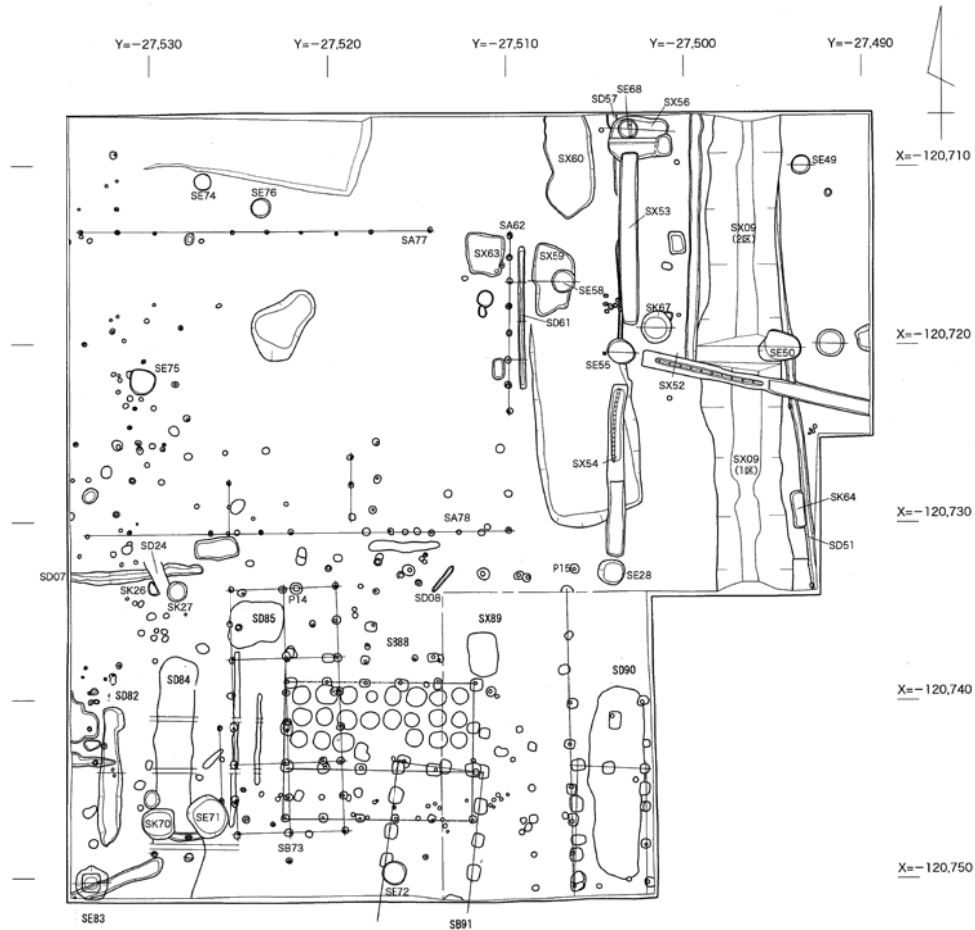
溝 SD85 SB88 の北西にある小さな溝で、土器片と焼けた土や炭が見つかっています。おそらくゴミなどを焼却した跡と見られます。

溝 SD90 SB88 の東側にある南北溝で、幅約 3 m、深さは 0.3 m あります。長岡京期の遺物が少量出土していて、須恵器大甕の破片も確認できます。これらの溝群は掘立柱建物 SB88 を取り囲むように作られていることから、建物に関連する機能を持っていたと見られます。

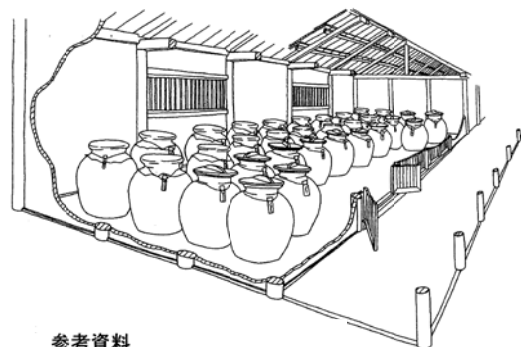
〈江戸時代〉

掘立柱建物 SB73、柵列 SA62・77・78、落込み SX89 2 トレンチの西側を中心に遺構が見つかっています。建物に伴う遺物は非常に少ないのですが、落込み SX89 の遺物から江戸時代前半ころのものと推定しています。この時期には当地周辺は宅地であったようですが、その後水田として開発されていったようです。調査地内にはたくさんの井戸が見つかりますが、灌漑用として掘られたものと見られます。

土管理納施設（井戸 SE28・55・68、土管理納坑 SX52～54） これは水脈に掘られた井戸から土管と井戸使って水を遠くへ導くもので、今のところ他に例がない珍しいものです。直径約 1.5 m、深さ 3 m の円形井戸 SE28 は水脈に掘られていて、今も壁からは水が湧き出ています。この SE28 の北側に約 20 m 間隔で井戸 SE 55・68 を作り、その間に幅 1 m、深さ 3 m の溝を掘り、底部に土管を埋設して水を北側に導いていたようです。さらに SE 55 から東に向かってもう一本の溝を掘り、分岐させて水を流していました。作られた時期は正確にはわかりませんが、江戸時代後期には存在していたようで、昭和の中頃まで使われていたようです。大変な手間と暇のかかるもので、水の便の悪い土地を開発するためにいかに先人たちが苦労したのかを偲ばせるものといえます。

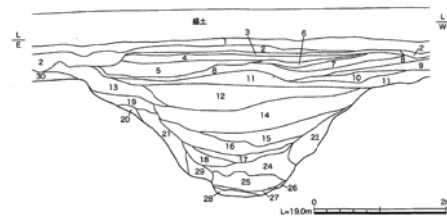


R1019 2トレンチ平面図 (1/300)

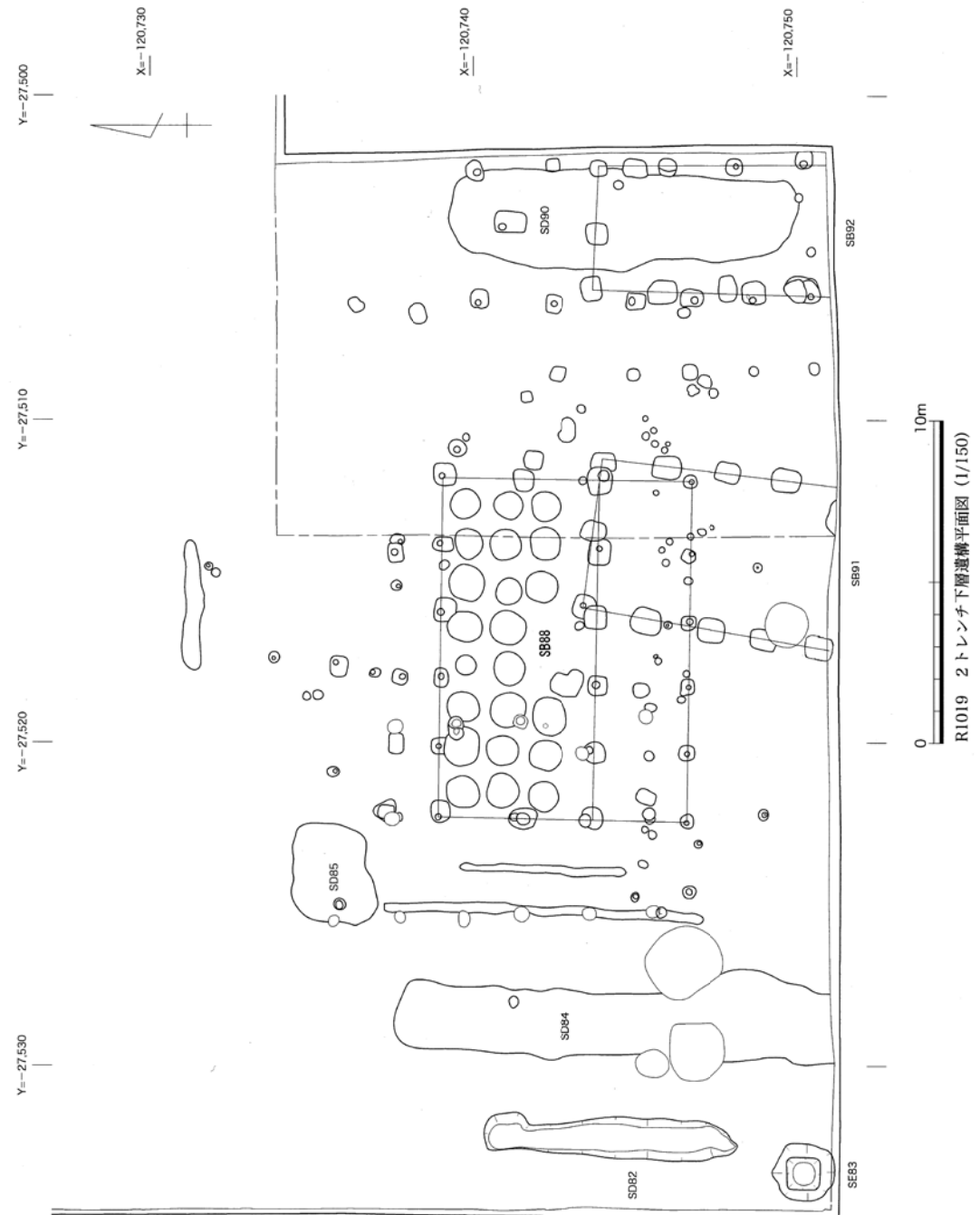


参考資料

2トレンチ西側（右京第217次調査）で見つかった
甕据え付け穴を持つ建物の推定復元図



堀 SX09 南壁断面図 (1/80)



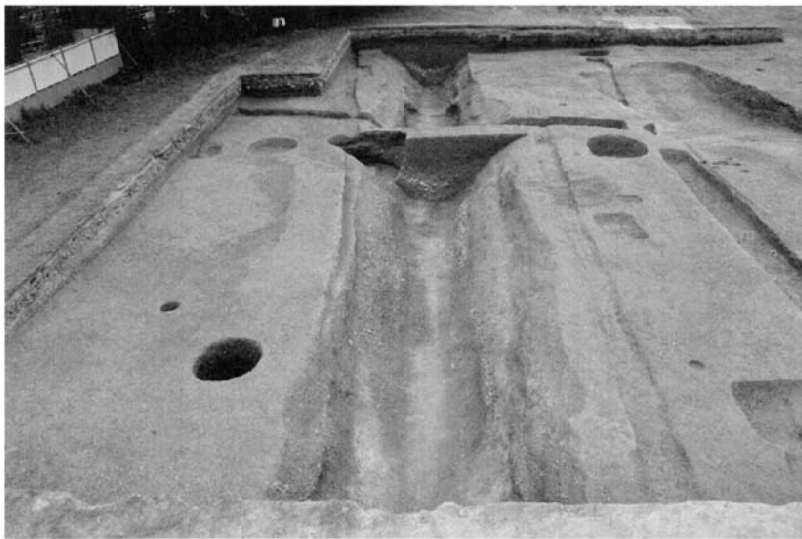
R1019 2トレンチ下層遺構平面図 (1/150)



長岡京跡右京第 1019 次調査地 2 トレンチ全景（北東から）



平安時代 井戸 SE83 土器出土状況（北から）



戦国時代 堀 SX09（北から）



長岡京期 掘立柱建物 SB88（北から）